

# CSRと環境と未来と

今回は、「仕事とはなにか」でした。その仕事を新しくしていくのは、自ら抱く抱負です。宇宙から、世界を眺めてみませんか。空からみる世界は、地上からみている世界とは、違っています。現在でなく、未来がみえるからです。CSRと環境の未来です。

## お問い合わせは

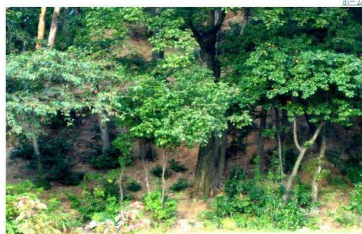
トリプルボトムラインLLP  
〒460-0016  
名古屋市中区橋下町1-17-28  
TEL052-332-1187  
FAX052-332-1187

**TBLLLP**  
2008年の計画

- ・CSRサステナビリティ評価基準  
「TBLAS2008」の発行
- ・社内イントラネット用（汎用）CSR支援ウェブサイトの発行
- ・CSRニュースレター「企業の自立」  
Vol.005～Vol.008 4回発行
- ・CSRサステナビリティ評価基準  
「TBLAS2008」説明会の開催
- ・TBLLLP公式ウェブサイトの第2期へ更新リニューアル

**TBL**LLP  
トリプルボトムラインLLP  
Mail: info@tblllp.com  
URL: http://tblllp.com

TBLLP	CSR	ステークホルダー	CSRイニシアティブ	トップリンク
-------	-----	----------	------------	--------



ディーセンシーのすゝめ

ディーセンシー（dearney）は、時と場所と立場（身分）によって、礼儀正しい、上品な、きちんとした、見苦しくない、情み深いなどの意味があります。ありがたさや、いえること、といった分かりやすいかもしれません。人の心ここにそれる入れば、そう正論をまちがうことがないということです。CSRの時代といわれる今日、このことばを一つここに置いておきたいものです。きっと、いままで見えなかったものが見えてきます。

Copyright (C) TRIPLE BOTTOM LINE, Limited Liability Partnership. All rights reserved.

☆編集室から

CSRニュースレターVol.005をお届けします。次回は2008年4月1日発行予定です。ニュースレター各号は、配布用pdfを用意しています。ご入用の方は、Mail: info@tblllp.com までご連絡ください。

# 企業の自立

CSRニュースレター 2008・01・01

Vol.005

## 特集 会社の存在理由 ～仕事とはなにか～

### 仕事とはなにか

「天は自ら助くるものを助く」という「自助論」で有名なサムエル・スマイルズは、仕事の社会的な意義を、こう言っています。

「人間の内に秘められた才能は、仕事を通して完成されるのであり、文明は労働の産物である向上心」

しかし今日、大多数の人は、このまま手なり納得できないでしょう。きれいごとという人がいるでしょう。条件によるはずだという人もいます。

たしかに世の中は競争原理で動き、人はスタートラインから平等とはいえません。裸一貫とみるとしても、人にすぐれた才能は、もって生れた幸運にみえます。

### 才能とはなにか

スマイルズが「秘められた才能」として、いることに注意してください。その実質的な意味はこうです。

「仕事人が人を育て、仕事人が人から才能を引き出す」のです。

才能ははじめから人にあるのではなく、仕事を懸命にすることから、人のなかから芽生えるものというべきでしょう。

条件というなら、この「懸命にする」というところが条件です。それはスタートラインでも、生まれつきでも、すべて人に平等にひらかれた行為ですから。

仕事の、「だれが、だれに、なにを」というWのうち、「だれが」という側面です。この側面を天職といえます。

天職としての仕事には貴賤はなく、才能に上下はありません。引きだされる才能はすべて自分のなかにあったものだからです。それが自分らしさです。

ここでは、どんな仕事でも、その人に合った仕事であり、どれだけ自分らしさを発揮できるかということだけが意義をもちます。

仕事のもつもうひとつ別の面があります。「だれに、なにを」という側面です。

### 剣と十字架のエピソード

ベケットという人の話をします。トマス・ベケットは十二世紀のイングランド人騎士、聖職者です。

## 謹賀新年

今年、平成二十年、戊子（つちのえね）の年です。環境元年と云ったのは平成八年、CSR元年と云われたのは、平成十五年のことでした。年初めにあたり、今年、企業の自立元年と云われるよう「かぐや」から、はるか地球を臨みつつ、祈念いたします。

プランタジネット朝の王ヘンリ二世が即位したときに仕え、執事から大法官に立身、王の寵愛をうけ、騎士として無二の朋友、股肱の臣となりました。

後、王の命でカンタベリー大司教に任じられます。ベケットを抜擢した王の意図は、旧来、王に敵対していた教会の勢力を懐柔しようとしたものでした。

ベケットは固辞して後、押命しましたが、そのときの弁が有名です。「まもなく陛下には、私を愛してらっしゃるのと同じくらい、私を憎むようになりましょう」

王は一笑しましたが、ベケットは本気でした。カンタベリー大司教に着任するなり、美服を脱いでぼろ着をまとい、一転して教会と教義を奉じて王の命に背いたのです。

弾圧をうけながら、頑として大司教としての職責を遂行し、その後の短い生涯をひたすら聖職者として生き、ついに王によって暗殺されます。

埋葬のとき、その粗衣を剥ぐと、ベケットの背中には、自ら打ったムチの跡が刻まれている。人々はベケットを殉教者と称え、ローマ法王は追悼して聖トマスとしたのです。

**ベケット原則**

トマス・ベケットの一生は波瀾に富んでみえますが、ベケット自身にとっては不都合ではなかったのです。王の側近であったベケットは臣下としても騎士・朋友としても文句のない存在でした。カンタベリー大司教となったベケットは神のしもべとしてあくまで聖職者としてあろうとしました。

この世がベケットに与えた職責に、彼はただ忠実であろうとしたのです。これをベケット原則といいます。

仕事は「だれのために」するのか。そのために「なにを」するのかという、仕事のもうひとつの側面です。

この側面を「使命」といいます。「存在理由」とも「存在意義」ともいいます。そのときどきの使命がベケットには至上のものでした。人は使命で動き、使命に生きるのです。

**人はなぜ仕事をするのか**

さて、そうはいっても、人はだれしもベケットのように身をなげうって仕事に献身するわけではありません。

したがって、会社や会社ではたらく自分にあてはめて、使命とはなにか、会社や自分の存在理由とはなにか、と問うまえに、もっとかんなに自問自答するのがいいでしょう。

自分はなぜ仕事をするのかという質問です。

シンプルな問いですが、じつは、あたりまえの問いではありません。それは、あなたが、ほんとうにそういう問いを自分に向けたことがあるかと大きくとはつきりします。

おそらくほとんどの人はそういう自問自答をしたことがありません。なぜなら仕事をすることはあたりまえかすくなくともしかたがないか、いやいやでもしなければならぬかのように思いこんでいるからです。

これではただの義務感ですね。でもほんとうはそんなことではないのです。

**人の役に立つこと**

端的にいいます。

人が仕事をする理由、それは、人がこの場合の人は他人つまり自分以外の人のことですから、よぶのがみたくからです。

そんなはずはないという人は、いちど家族のために料理をしてみてください。それから、日を改めて、こんどは、自分のためにだけ、しっかり料理してみてください。

すると分かることがあるでしょう。

特集 ～仕事とはなにか～ じぶき



アオギリ(青桐)。アオギリ科の落葉高木。大気浄化能力A、大気汚染抵抗性Aの環境樹木です。燃えにくく、昔から防火樹として植えられ、広島県の爆心地を生き抜いた被爆アオギリの苗は、命と平和の樹として世界の街へ移植されています。

会社とは、仕事そのものを再生産する組織でもあるという(1)ですね。

仕事とは、営為であり生業(なりわい)です。継続的に役に立っているなにか、それが会社の使命であり、そこで仕事する一人ひとりの使命です。

その仕事を、よりよくしようと、自然にいだく抱負が、天職であり、ひらいていく自分の才能です。

**さて、自分にとっての仕事とはなにか**

ここからがやつとスタートラインです。それは会社ごと、社員の一人ひとりです。違っているから。だから、自分で考えるしかありません。

どう自分らしさを発揮できるのか、と。そこを自分でみつけたとき、迷うことのない価値観が生まれ、使命があらわれます。CSRとは、その使命を、自分ながらにまっとうすることにほかなりません。

(文) TBL LLP 代表・志水洋右

「企業の自立」はTBLのオリジナルコンセプトです。



トリプルボトムラインLLP

家族がよるこんで食べているのをみるのはうれいものだと気づくでしょう。そこで一緒に食べるのも、いつもとちがっておいしいのです。

それから、自分でつくって、ひとりで食べてみた人は、よくできたとしてもおいしくありません。

家庭をもつばらとする女性がひとりで食べるのが朝夕食時の余りものというのは当然のことといわなければなりません。

こうした日常の現象は、じつは人々にたせつなことを学ばせてくれます。人はだれもが、なにか人の役に立つようなことかしたいのだという事実です。

**使命の自覚**

そんなことはない、自分は自分が満足ならそれでいい、それだけが望みだという人は大勢いるでしょう。それがほとんどだという人もいます。

しかしそれは思い違いです。

人は、自分の行為に(それを正当化する)理屈が必要な唯一の動物です。したがって、なんにでも理屈をつけます。

家族のため、生活のため、金のため、自分のため、自己実現、とにかく立身出世、お大尽になる、故郷に錦を飾る、末は博士か大臣か、だれそれを見返す。なんでもいいのです。だから小理屈なのです。

仕事とは、世の中に、現実には、使用者利用者・消費者に、なんらか役に立つためにする、継続的な行為です。それが使命であり存在理由です。

それが「だれに」の自身であり、その具体的な製品・サービスが「なにを」の自身です。

**仕事の再生産**

最後に「営為」について述べます。これは前回に述べた「営利」と対をなすことばです。

営為は、営(暇なく)いとまなく、為す(業す)という意味で、つまり継続的な仕事ということ。そこに、生計・稼ぎという意味もふくまれます。昔は「生業(なりわい)なりわい」といいました。

つまり、営為＝生業は、仕事ということに、継続的ということ、たつき(暮らしの手段)という意味を、付帯していることばです。

「人はパンのみに生きるにあらず」ということばは、パン(生計)も大事、仕事も大事という意味ですね。

これは、営利が、利益以上に、関係者への付加価値分配であったのと同様です。

そこで、営利の付加価値に相当するものが営為の仕事です。そして、それを継続的に行うということから、営利が、付加価値の再生産であったように、営為は仕事の再生産という行為なのです。

**3. 法と自由**

法律は、違反に対する制裁をとまいません。それを違法の抑止力とします。したがって、その遵守の可否は、ただ組織の自主性にのみゆだねられます。すなわち自由です。

CSRの今日、組織はこの判断の自由をあらためて肯定しなければなりません。

すると、そこに客観指標と主観指標との違いは消失します。主体からみる主体的指標のみが存在することになります。

**4. 第三者評価**

したがって、第三者が持つべきことばは一つです。

世界が組織に要請するところ(経済・社会・環境パフォーマンス)と、組織が世界に配慮するところとを、ともに組織の主体的な指標とみなし、ひとしく適正に評価することです。

TBLASは、この視点で組織を評価します。CSRは他律でなくひたすら自律のものです。

評価後、不正が発覚することがあれば、関与せず、世界とともに、評価の無効を宣します。

評価とは、組織の自由と善意と自主性による開示にのみ、基づくものとするからです。

**CSRサステナビリティ評価基準「TBLAS2008」**  
Triple Bottom Line Assessment Standard  
発行

TBLASは、TBL LLP(トリプルボトムライン)有責任事業組合が提供する、組織への第三者による評価基準(Assessment Standard)です。

**1. 評価原則**

監査(Audit)と、保証(Assurance)とをなく、評価なし査定(Assessment)とす。

組織へのあらゆる評価の本質は、組織のパフォーマンス評価であるべきであるという、TBL LLPの原則にもとづきます。

**2. 客観指標と主観指標**

パフォーマンスは、組織が本来あるべきとされる、客体からみる客観的な指標に対するパフォーマンスと、組織が自らあろうとする主体からみる主観的な指標にもとづくパフォーマンスとがあります。

前者は強制、たとえば会計原則です。後者は、自主性、たとえば温室効果ガス削減です。

TBL LLPは、その二つの区分をしません。